

太子の思想、WAの精神を世界へ

「和」とは循環と寛容、そして調和の精神です。その中でも寛容とは赦し、受け入れ、認め、尊重し合う、許しの思想です。「和の精神」とはそんな日本人が自然の摂理から導き出した、世界に通用する普遍的な考え方です。

一九八七年に国連で「持続可能な開発」という考え方が提言されて以来、ビジネスの世界で「サステナブル」という言葉が、日増しに聞かれるようになりました。そして、世界で求められているサステナブルな社会の実現のためには、循環型の経済や社会の構築が必要となります。

また、地球規模で進む経済や社会のグローバル化にあたり、「多様性」という言葉も近年聞かれるようになりました。これは社会の発展は文化、宗教、民族、人種の多様性によってもたらされるという考え方です。そして、この多様性は互いを許し合う寛容の精神から生まれます。つまり、世界が「和の精神」を求めているということです。

今後の我が国は人口減少に伴い、ますます外国人労働者の手を借りなければなりません。すでに様々な分野で人手不足は深刻で、多くの外国人が働いている姿を私たちは目にしています。

その一方で世界の先進国では、難民や移民が社会問題となっているように、地元民との軋轢（あつれき）や、外国人による犯罪やトラブルが増え、我が国でも移民問題が深刻化することが予想されます。しかし、解決策がないわけではありません。そのヒントがかつてのアメリカにあるのです。

元来が移民の国であるアメリカ合衆国がなぜ超大国として、いざとなれば国民が一致団結できるのか。それはかつてのアメリカには**世界の人々が憧れる理念**があったからです。「自由の女神」に象徴される自由の国アメリカ、フロンティア・スピリッツのアメリカ、アメリカン・ドリーム。アメリカに移り住んだ移民たちはその理念に憧れ、その理念を守るために、時に国に命を捧げ、アメリカ人になろうとしました。

今、我が国に求められているのは、世界の人々が憧れる日本ならではの理念を示すことです。二番煎じの理念ではいけません。そして、それこそが我が国固有の国是、聖徳太子が『十七条憲法』の第一条で顕された「和をもって貴しとなす」に他ありません。すなわち日本国の国柄と日本人のあり方を示した「和の精神」です。そして、それを求めて日本にやってくる人々を増やさなければなりません。

聖徳太子が生きた時代の日本は、ちょうど現在のアメリカ合衆国のように、多種多様

な民族が大陸から移り住んできたといわれています。また、太子が八人の話を一度に理解できたという豊聡耳(とよさとみみ)の伝説も、八カ国語を理解できたことによるものともいわれています。

私たちの祖国は元来が多種多様な民族によって形成された、多民族国家であったと考えるならば、さまざまな価値観を共に分かち合い、共有し合いながら一つにまとめることは、私たちの先祖たちが辿ってきた道でもあり、それが日本人の本来の姿なのです。ならば原点回帰をすればよいことです。

日本人は古来より太陽を神として拝んできました。世界の多くの民族もまた太陽を神と崇めてきました。それは太陽が分け隔てなく、全てのものに恵みを与える、神の愛を象徴しているからともいえます。私たち日本人が古来より太陽を崇め敬ってきたのも、自然の恵みにただ感謝するためだけでなく、そのような大きな愛を太陽に感じてきたからでしょう。それこそが聖徳太子が日本人に顕した「和をもって尊しとなす」の理想、強い愛の力をもって大きく和するという「大和心」の神髄です。

誤解を恐れずにいえば、太陽の心、すなわち大和の精神を有するならば、たとえその者がどのような背景を持っていようとも、あるいはどのような国籍を有していようとも、広い意味での「日ノ本ノ民」、「太陽の民」、つまり「日本人」として、ともに共存共栄して生きればよいのです。なぜならそれが元来の日本人の感性だからです。

すべてのものに恵みを与える太陽の民。そのことにこそ、私たちは民族としての誇りを持つべきでしょう。そして、この理念のもとに日本にルーツを持つ者と、持たない者が、互いに協力し合って、日本を支えることを目指さなければならない時代を、私たちは迎えようとしているのです。

そして現在、世界の脅威となっているテロ集団の思想が、世界に絶望を与える陰の極だとしたら、この「WA Spirit」を世界に希望を与える陽の極にする使命と役割が私たち日本人と、世界の雛型ともいわれる日本国にはあるといえましょう。

四月三日の十七条憲法制定の日に執り行われるこのたびの奉納イベントによって、我が国の国家理念が国内外にしっかりと示されて、国際社会に「和の国日本」が認知されること。さらに日本国と日本人が「和の盟主」として、世界の恒久平和と共存共栄に貢献できることを願ってやみません。

和プロジェクト TAISHI 代表
宮本辰彦